

とうきょうすくわくプログラム
二〇二四年度活動報告書

まちの保育園 吉祥寺



1. 活動のテーマ

活動のテーマ

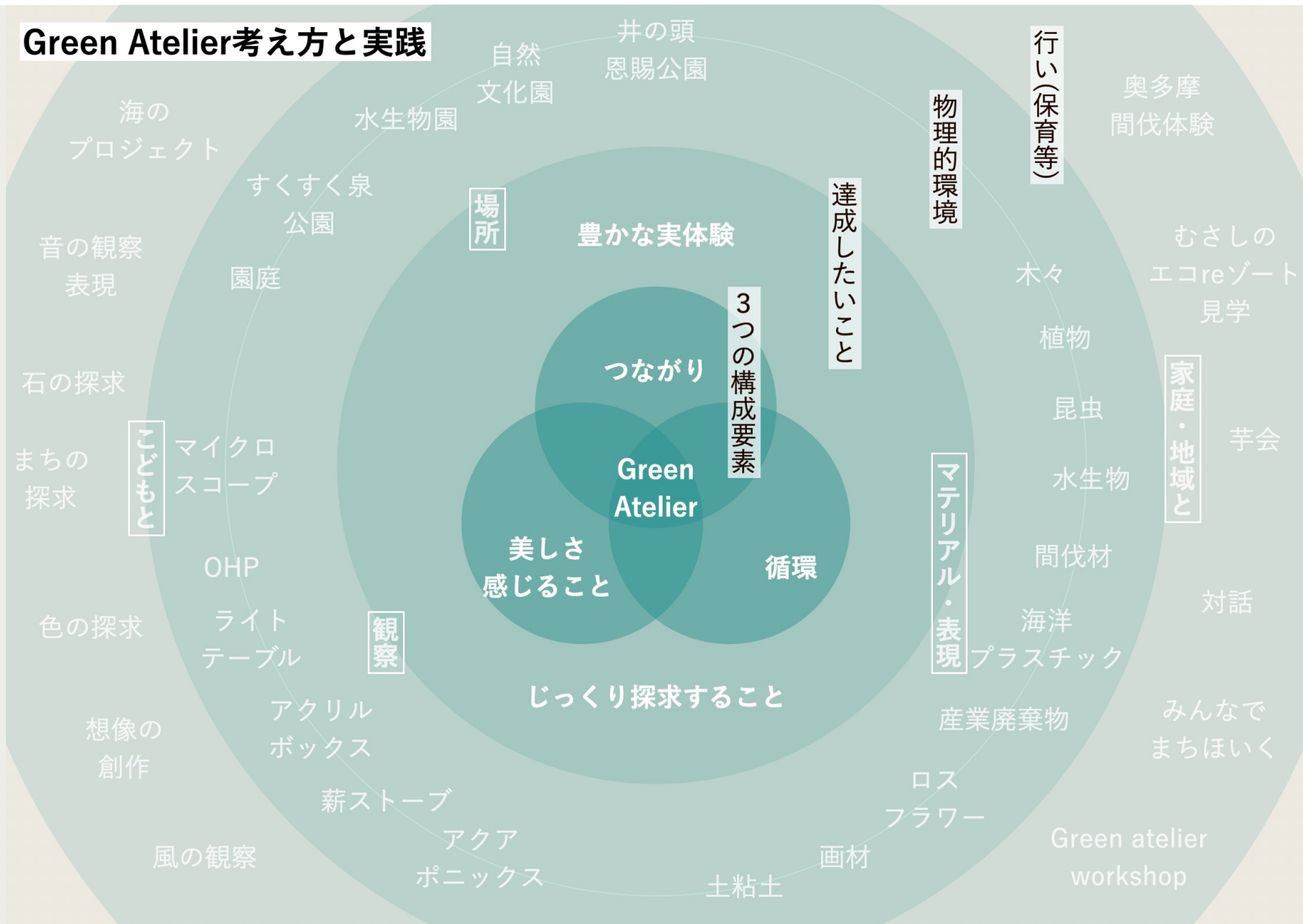
職員・保護者との対話を通して、「園で大切にしたいこと」「子どもに経験してほしいこと」を探る中で、以下の3つのキーワードが浮かび上がった

- つながり（地域・自然・人との関係性）
- 美しさを感じる（感性・五感の働き）
- 循環（自然の流れ、命のめぐり）

この3つを大切にしたい実体験や、じっくりと探究する活動を「*グリーンアトリエ」と呼び、年間を通じて展開している

*次ページスライド参照

Green Atelier考え方と実践



2. テーマの設定理由

テーマの設定理由

今回のプログラムの目的を踏まえた活動を検討するにあたり、私たちはこれまで「まちの保育園吉祥寺」として大切にしてきた“グリーンアトリエ”という考え方や、積み重ねてきた実践を継続することが、職員や子どもたちにとって最も自然な形であると感じました。そのため新たなテーマを設けるのではなく、これまでの歩みを土台にしながら、グリーンアトリエの実践をさらに深めていくこととしました。

3. 活動スケジュール

活動のスケジュール

- グリーンアトリエの活動は、日々の生活や子どもたちの興味・関心から立ち上がるものであり、特定の時期に特定の活動を行うといったスケジュールではなく、継続的かつ柔軟に活動を実施した。
- 職員は日々の保育記録やドキュメンテーションを通して振り返りを行い、週2～3回、担当職員・施設長と午睡時間に内容を共有・対話。園全体での振り返りは、月2回法人所属のペダゴジスタ来園時に実施。
- 保護者とは、園内掲示や月1回の園だよりなどで活動の共有を行っている。

4. 活動のために準備した素材や道具

活動のために準備した素材や道具

- 0歳児クラス
OHP、ライト、自然光、葉っぱ、影を生み出す遊具や窓環境そのもの（日光や木陰など）も教材として活用
- 4歳児クラス
プランター、土、綿の苗、OHP、ライトテーブル、プロジェクター、カメラ（記録用）
紙、絵の具、土粘土、ペンなど表現用素材

5. 活動の内容

活動の内容（0歳児）

0歳児クラス：「影との出会い」

- 日々の生活の中で、子どもたちが影の存在に気づく場面があった。
- 自分の影に気づいてバイバイと手を振る、先生の影を見て「先生」と認識するなどの行動が見られた。
- 保育室ではOHPやライトを用いて影の観察を促し、外では木陰や葉っぱの影を発見する体験も行われた。

以下本活動のドキュメンテーション



影との出会いは園庭から始まりました。

人が通るたびに動いては消える影。

見つけると目で追い興味を向ける姿がありました。

保育者の影が映った際にふと手の形も映してみる

とその影にバイバイと手を振り始め



「ここ」

こんな風に影が見えなくなると、
不思議そうに「ここ」とあった場所を指差します。

そして、影が再び見えると、また手を振る。

そんなやりとりを繰り返す姿から、子どもたちは「ある」と「ない」という影の関係性そのものを楽しんでいるように感じました。

その様子を見ている中で、私はふと「子どもたちはこの影を誰の手だと思っているのだろうか?」「そもそも、影だと認識しているのだろうか?」という疑問が湧いてきました。

大人にとっては当たり前に存在する自然現象である“影”も、子どもたちにとってはまったく違う感じ方や捉え方があるのではないか——。

そう考えたことをきっかけに、影にフォーカスした遊びを展開してみることになりました。





影遊びを展開するにあたり、まずは室内でライトを当て、
影と出会い直す環境を作りました。
自分の影が映し出されると、すぐに気が付き、
なんだろうとじっと見つめて触ります。
遊ぶ中で次に映ったのは、、、

「せんせい」



大きい保育者の影でした。
するとこの影を「せんせい」と言う姿
がありました。この子に「先生」と呼
んでもらったのも初めてだったので
とっても驚いたのですが、
もう一つ不思議に思ったことが、顔の
パーツが見えなくても先生とわかった
ことです。影の形から人という認識が
ついたのでしょうか？色んな考察が浮
かび上がりました。

「せんせい」

A photograph of a young child with dark hair, wearing a green and blue striped long-sleeved shirt and grey pants, standing in a room. The child is facing away from the camera, looking at a large, dark shadow of their own head and shoulders cast onto a light-colored wall. To the left of the child is a wooden shelf with a small white cat-shaped object. In the foreground, a 3M projector is visible, casting a bright light onto the floor. The scene is lit by natural light from a window on the right.

先日は自分の影を見ても何も言わなかったのに、
 どうしてはこれは先生だったのだろうとまた不思議に思いました。前回の経験から「影」が「せんせい」という言葉で結びついたのか、または、保育者のように大きい影が映ったからなのか、疑問も仮説もたくさん浮かびました。

0歳児クラスの子どもたちは、このような「どうしてそう思ったのか」という思いや考えを、詳しく言葉のやりとりとしてすることはまだありません。ですが、このような0歳児ならではの純粋な反応と言葉を通して、こうだったのかなと私たちが解釈し、考察し、次の遊びの展開へと循環していけるのだと思っています。



また影との出会いから、日常の中で見られる影を子どもたちと一緒に見つけ、同じ眼差しで見ていくことを重ねていきました。そのような日々を重ねる中で、今度は子どもたち自身がさまざまな影を見つけるようにもなっています。ここからさらにどのような影を見つけ、何を感じ、どのように考えていくのだろうと遊びの展開や環境を考えていきたいと思っています。

活動の内容（4歳児）

4歳児クラス：「葉脈と血管」

- 綿の栽培をきっかけに、葉の葉脈に興味を持つ子どもたち。
- 「地図みたい」「血管かな？」という発言から、自分の体とのつながりへと関心が広がる。
- プロジェクターで葉脈を体に投影したり、友達の耳にライトを当てて毛細血管を観察。「血は青いカプセルに入ってるんだよ」という独自の考察も登場。血管が青く見える理由を、子どもなりに仮説として捉える姿が見られた。
- 土の中や根っこの構造にも興味が広がり、プロジェクターで根っこのイメージを投影しながら、土粘土で表現する活動も行った。

以下ドキュメンテーション

ある日、Nさんが

“わたの葉っぱのカタチ”と、
“自分の手のカタチ”が似ていることに気がつきました。

同じ生き物として、わたの葉っぱと人間に共通点がある。

面白い気づきだなと思い、きのみのみんなで葉っぱをよく
見てみることにしました。





ライトテーブルに置くと、葉脈が浮き上がり、細かい部分がよく見えます。

その様子に夢中になり。

「おおきなまちみたい」とAさん。
「なんかさ、これちずみたいだね」とJさん。

葉っぱの中にまちがあるなんて、なんて素敵な発見だろう。

よくみて、さわって、

「葉っぱの絵を描いてみない？」と提案してみました。



葉脈を見つめて

「これって、けっかんかな？」

いきものってちがあるもん。」

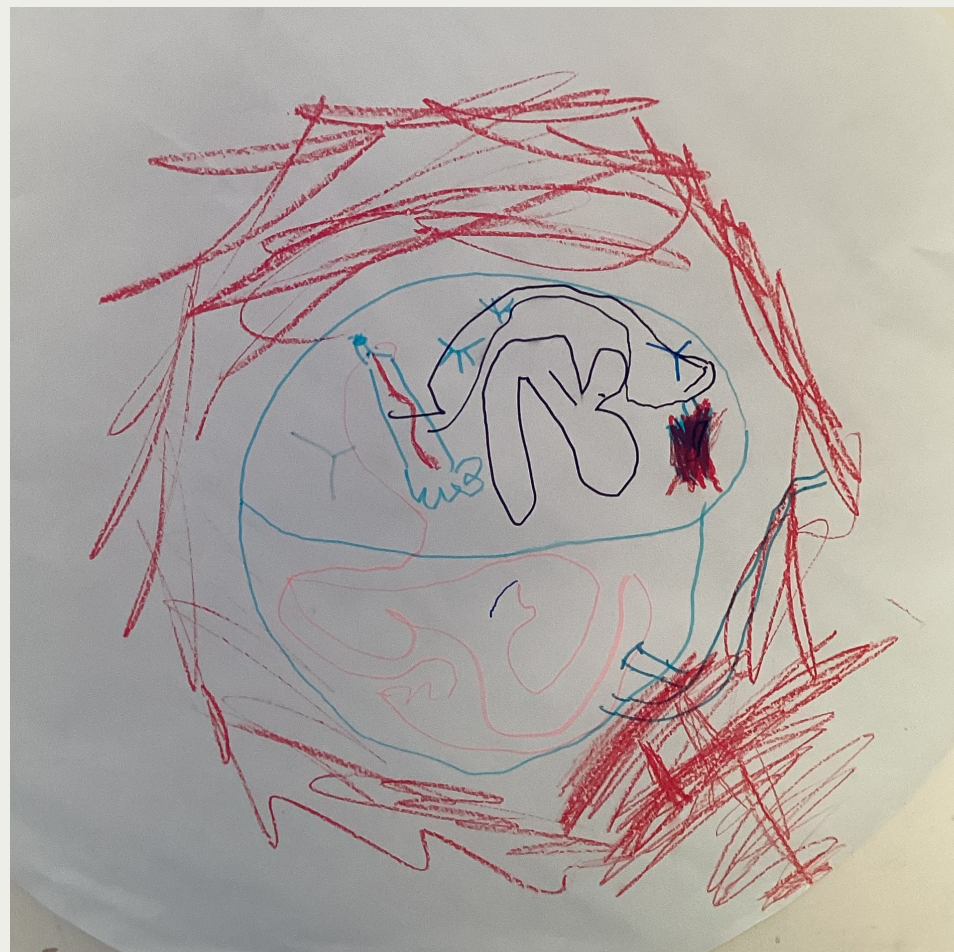


Kさんは葉っぱのカタチではなく葉脈の線を繋いで描いていきます。
よくみると葉っぱに黒い点々があることに気がつき、葉脈とのつながりを丁寧に描いています。
そして、仮説を立てていきます。どこから水を吸うのか。どうして血がここに流れているのか。

わたの蕾は中に水がたくさん入っていて、
「みずがわたになるんじゃない？」「なんで、みずがちになるんだろう？」

言葉だけで聞いていると、なんのことだろう？と皆さんは思いを巡らせるとおもいますが、
Kさんと共に経験を重ねている私にとってはひとつひとつ、彼が経験をもとに仮説を立て
めいっぱい思考を耕してるように感じることができます。

「なんかたぶん、“ち”はカプセルみたいなのはいってるからあおいろのカプセルみたいなのが
からだにあるんだよ。」Mさん





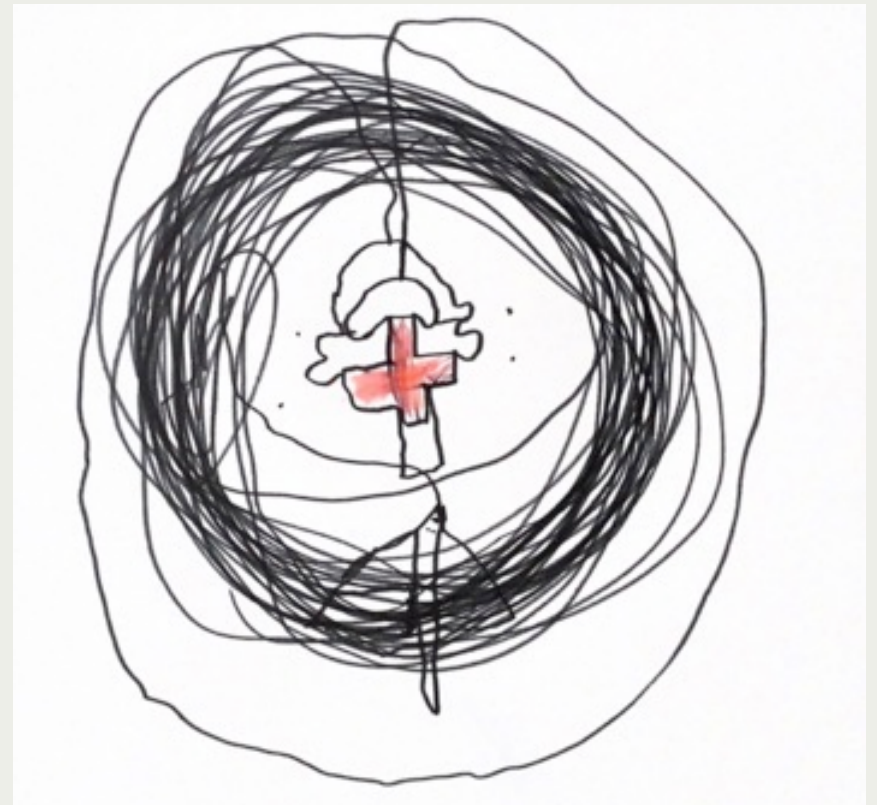
「はっぱにんげんだ！」

「けっかんみたい！」



あたまからあしのさきまで ずっとつづいてる
Eさん

Aさんはしんぞうのなかをかいています
「てんてんはたべかすぐるぐるは“ち”」



6. 活動中の子どもの姿・声 子ども同士や保育者との関わり

活動中の子どもの姿・声、子ども同士や保育者との関わり

0歳児クラス

- 「あー」「うー」といった喃語や身振りを通して、影への気づきを表現。
- 保育者は子どもの視線や動きに丁寧に応答し、興味の先に寄り添う関わりを行っていた。

4歳児クラス

- 子どもたちは言葉・イメージを豊かに表現。「おおきなまちみたい」「ちがながれていくのかも」「あおいカプセルにはいってるんじゃない？」など、科学的感覚と空想が混ざり合った発言も。
- 絵の具や紙の大きさを自分で選び、表現活動に主体的に取り組む姿が多く見られた。
- 子ども同士で発見を伝え合い、身体に投影された葉脈を見ながら「これけっかんだね！」と語り合う場面もあった。

7. 振り返りによって得た先生の気づき

振り返りによって得た先生の気づき

- 身近な環境（光、影、葉、土）に対する子どもたちの感性の鋭さを改めて感じた。
- 子どもの発言や行動の中に、「科学的思考」「仮説を立てる力」「表現する力」が自然と現れていることに気づく。
- 活動を記録し、振り返ることで、保育者自身の問いやまなざしが深まり、次の活動や環境構成に活かされていく。
- 表現された絵や言葉、行動を記録するドキュメンテーションは、保育者間の共有だけでなく、子どもや保護者にとっても「育ちを見える化する大切な手段」であることを再認識。
- 子どもたちが自分の身体や自然の仕組みに目を向けることで、「生きること」や「自分ってなんだろう」という本質的な問いにつながる可能性を感じた。
- 子どもたちは思いもつかないことに気づき、知っていき、興味へとつながっている。その姿を大切にしたいと思っている。
- このような事例を通して、0歳児の子たちと4歳の児の子へと活動は違うけれど、このような探究心が繋がっているのだと思う。そのためその発見を大切にできる環境を作り、豊かな実体験へとつながっていったらいいなと感じる。

子どもたちと 大人たちの
わくわくを大切に





わ た



